

6. おわりに

会議が行われたイタリアのポローニャは、中世の古い大学と街並みと現在の人々の生活がうまく融合したとても美しい街であった。しかし、バスでスリのグループに囲まれたり、子連れジプシーや執拗なねだりなど、ゆっくりルネッサンスの文化にひたる余裕はなくなってしまった方もおられた。それでも数百年以上の古い建物で現代の人々が生活している様子や、洋の東西を問わず宗教文化の荘厳さには目を見張るものがあった。

口頭発表では、一部の著名研究者だけでなく、議論の主役の顔ぶれが日毎に変わっていたことが印象的であった。ポスターセッションでは、コーヒーブレイクの時間を惜しんででも熱心に議論している姿が見られた。大きな会議では、空いた時間も仲間内での雑談に終わらせない姿勢が重要である。ポスターは、前半2日と後半2日で入れ替え、各2件のベストポスター賞がボランティアの審査員7名によって選ばれた。残念ながら日本からは選ばれなかった。国際学会での発表、特にポスター発表では、自分の研究がどの程度世界の研究者に関心をもたれるかを、人の集まり具合で露骨に実感することになる。注目を集める研究=良い研究では必ずしもないが、ポスター印刷が容易になった分、内容はもちろんのこと、きれいという以外に成果を効果的に表現する方法に一工夫が必要であろう。

数値モデルの高分解能・高精度化に伴い、モデルの雲物理量予測の検証は今後も重要性が増すと思われるが、それには高分解能で良質な観測データセットの取

得と解析が不可欠である。欧米ではそのための体制が充実していることが窺えたが、日本でも横断的且つ継続的な観測データの取得と、それを解析する体制作りを進めていく必要性を強く感じた。更に、今回の発表を通じて、欧米における雲微物理関連の測器開発に対する力の入れ方と研究者の層の厚さには感嘆した。氷晶核、雲核の個数の測定や物質の同定、更に雲粒数、氷晶数の測定のための新たな装置の開発を、日本でも積極的に推進する必要性を改めて認識した。

なお、大学院生(大東, 清水)の学会出席の旅費の一部は、日本気象学会の国際学術交流委員会から補助を受けました。記して感謝致します。

略語一覧

- NASA: National Aeronautics and Space Administration (米国航空宇宙局)
- AMSR-E: Advanced Microwave Scanning Radiometer for EOS (Earth Observing System) (改良型マイクロ波放射計)
- TRMM: Tropical Rainfall Measuring Mission (熱帯降雨観測衛星)
- METEOSAT: 欧州気象衛星機関の気象衛星
- ETH: Eidgenössische Technische Hochschule (スイス工科大学)
- NCAR: National Center for Atmospheric Research (米国大気科学研究センター)
- ISAC-CNR: Institute of Atmospheric Sciences and Climate, National Research Council (イタリア大気科学・気候研究所)

第1回 日本・中国・韓国気象学会共催の国際シンポジウムのお知らせ

かねてより、日本、中国、韓国の気象学会の間では、学会間の交流を促進したいと考えて議論を続けてきました。その一環として、今回、日本気象学会春季大会にあわせて、3学会共催の国際シンポジウムを持ちたいと考えています。興味をお持ちの方はぜひご参加ください。

記

1. 日時: 2005年5月13日(金)~14日(土)
2. 場所: 東京大学山上会館, および、小柴ホール

(理学部1号館)(東京都文京区本郷)

3. テーマ: 東アジアにおける大気科学

今回は、招待講演を中心にプログラムが組まれますが、一部、コメントとして発表可能です。

プログラムの概要は、13日の午前中は、全体会議、13日の午後から、第1会場(気象、気候)と、第2会場(物質循環)に分かれて行われる予定です。詳細は、追って、学会のホームページ等に紹介します。